

— コ・メディカル・レポート —

助産師による妊婦健診時及び産後の面接が母性意識の 発達に及ぼす効果について

— 胎児の超音波画像を話題の中心とした介入を行って —

星 和 子

I. はじめに

母性意識は、その女性のそれまでの生育暦、生き方を反映させるものであるとともに、生きていく時代の社会状況により変化させられるものといえる。また、母親と子どもとの結びつきは、出産後に突然始まるわけではなく、妊娠期間を通じて、徐々に培われていくといわれている。過去においては、母性意識の自覚として、胎動の認知が重要とされていた。胎動を自覚することにより、自身の中に芽生えた生命を初めて実感するに至るといわれていた。しかし、1970年代以降、医療技術の進歩により、妊娠の診断や胎児心拍の確認という、ごく初期の段階から、超音波画像を用いての説明が行われるようになった。今日では、施設により実施回数の差こそあれ、妊婦健診時の超音波画像診断は欠かせないものとなっている。画像を介しての胎児—母子間の相互交流は、視覚的に胎児の情報を伝え、それに対して母親も何らかの感情を抱くことから、母性意識の発達上も、重要な意味を持つものと考えられ、妊婦が超音波画像をどの様に受け止め、活用しているか、意味づけているのかについて明らかにしていくことは、意義のあることと考えられる。先行研究を調査したところ、超音波画像が妊婦の心理に及ぼす影響については、何らかの効果あり (Langer M et al, 1988)¹⁾ (Myra S. Hunter et al, 1987)²⁾ とするものと、特に変化はない (Suzan M. Hedrich et al, 1989)³⁾ とする研究に分かれている。超音波画像について

話題にすることは、胎児に対する愛着を賦活化し、母性感情の形成にも役立つと考えられが、その点について、調べたものはまだない。

そこで本研究では、母性意識を発達の視点で捉え、適切な介入によって、形成され発達していくものと考えた。そして、胎児超音波画像を情報交換ツールとして利用した、母性意識形成のための効果的な支援のあり方について、調査を行い、明らかにしていくことを目的とする。妊婦健診時および産後の面談を行った介入群と介入を行わなかった非介入群の比較を行い、心理的效果についての検討をする。仮説は、「胎児超音波画像を情報交換ツールとして利用した介入により、妊婦の母性理念や胎児感情の向上に効果がみられる。」とした。

II. 対象および方法

1. 対象者

研究対象者は、対照群 29 名、介入群 28 名で、合計 57 名の妊産婦である。対照群 29 名の平均年齢は、27.8 歳 (18 歳～36 歳) であった。ただし、記入漏れなどにより、中期・産後の調査でデータを収集できたのは、28 名であった。一方、介入群のうち、分娩施設変更などのため、中期のデータは 25 名、産後のデータは 21 名のみの収集となった。平均年齢は、28.1 歳 (21 歳～41 歳) であった。対照群、介入群いずれも初産で、重篤な合併症のない者とした。調査時期については、初期は妊娠 7～15 週、妊娠 19～23 週、産後 3～5 日の間での実施となった。

2. 方法

(1) データ収集方法

産婦人科外来において妊婦健診が行われた後、書面にて事前説明を行い口頭で了解を得られた対象者に対して調査を行った。その際、質問紙調査のみを実施する対照群と、助産師による半構成的面接を行った後、質問紙調査を実施する介入群とに分け、データの収集を行った。質問紙は、花沢⁴⁾による母性理念質問紙(資料1)、胎児感情評定尺度(資料2)の2種類である。質問紙はその場で記入していただき、回収した。介入群に対する半構成的面接は、インタビューガイドに沿って実施した。助産師は面接中にメモを取り、その内容をもとに、面接後すみやかに逐語録を作成した。調査時期は、妊娠初期(妊娠10週前後)と中期(妊娠20週前後)である。また、出産後は、産褥3~5日の間に、対照群に対しては、質問紙調査のみを、実施した。介入群に対しては、出産時の振り返り(パースレビュー)をインタビューガイドに沿って実施し、その後、質問紙調査を実施した。

(2) データ収集期間

調査時期：平成19年10月より平成20年9月まで。

(3) データ分析方法

数値データは、統計ソフトJSTATを用いて、分析を行った。半構成的面接における逐語記録は、質的帰納的方法で分析を行った。

(4) 倫理的配慮

倫理的配慮として対象者に研究の主旨、研究参加の自由、診療には影響しないこと、プライバシーの保護について、口頭および文書で説明を行い、研究参加を断っても、診療上の不利を被ることはないことを保証した。

3. 用語の定義

本研究では、以下の用語をそれぞれ次のように定義する。

(1) 母性意識

母性意識の本質は「子どもへの共感的理解」とされ、生得的なものではなく、文化的社会的特性を反映するものである。また、妊娠や出産によって一度に発現するものでもなく、人格形成過程の

延長線上で捉えるべきものであり、育児性、擁護性、次世代育成性という言葉で置き換えられる⁵⁾。

(2) 母性理念

母性意識のうち、幼児期から生育史のうちに生成され、個人的経験を重ねることによって形成され変容するものと考えられる側面を、母性理念と定義する。

(3) 胎児感情

乳児に対して大人が抱く感情を総称して言い、肯定的側面(接近感情)と否定的側面(回避感情)に分けられる。

III. 結 果

1. 妊娠各期における母性理念の変化

(1) 対照群における母性理念の変化(表1-1)

妊娠初期の肯定得点は平均10.1(標準偏差10.48)、否定得点は、平均-2.9(標準偏差3.80)、妊娠中期の肯定得点は平均13.4(標準偏差8.14)、否定得点は、平均-3.4(標準偏差3.49)であった。産後の肯定得点は平均13.4(標準偏差8.14)、否定得点は、平均-4.8(標準偏差3.36)であった。初期・中期・産後の3群間でFriedman検定を行ったところ、肯定得点・否定得点共に有意差は認められなかった。

(2) 介入群における母性理念の変化(表1-2)

妊娠初期の肯定得点は平均12.1(標準偏差7.65)、否定得点は、平均-2.5(標準偏差3.26)、妊娠中期の肯定得点は平均10.9(標準偏差7.70)、否定得点は、平均-2.6(標準偏差4.52)であった。産後の肯定得点は平均13.9(標準偏差9.19)、否定得点は、平均-3.0(標準偏差3.42)であった。初期・中期・産後の3群間でFriedman検定を行ったところ、肯定得点において、中期と産後間で $p=0.0302$ となり5%水準で有意差が認められ、産後の肯定得点が有意に高くなっていた。否定得点では有意差は認められなかった。

(3) 対照群と介入群の比較(図1)

Mann-WhitneyのU検定を行ったところ、妊娠初期の肯定得点については $p=0.3926$ 、否定得点については、 $p=0.4554$ となり有意差は認められなかった。妊娠中期の肯定得点については $p=$

資料1. 母性理念質問紙

調査票1

次に、27項目の育児や女性の生活に関する意見があります。
それぞれの意見についてどう思うか、「非常にそう思う」「そう思う」「どちらともいえない」「ちがう」「非常にちがう」の5つの中から、あなたの考えに合うところを選び、□に1つチェックをつけてください。

	非常に そう 思う	そう 思う	ど ち ら と も い え な い	ち が う	非 常 に ち が う
1 妊娠は、女性にとってすばらしい出来事である。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2 赤ちゃんを産むことができるのは、女の特権である。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3 妊娠した自分の姿は、想像するだけでみじめである。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4 赤ちゃんを産んでみてはじめて、子どものかわいさがわかる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5 赤ちゃんを無事に産むためなら、どんな苦しみもがまんできる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6 女だけが妊娠やお産の苦労をするのは、不公平である。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7 女は子どもを産むことで、自分が生きた証拠を残すことができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8 どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9 予定していない妊娠の場合は、人工中絶もやむを得ない。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の務めである。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
11 女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
12 結婚生活を楽しむためには、子どもをつくらないほうがよい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
13 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
14 子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
15 わが子を他人にあずけても、自分の仕事を続けるべきである。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
16 子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
17 子どもがいることで、家庭生活はより楽しくなる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
18 育児は妻だけでなく、夫も分担すべき仕事である。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
19 わが子の成長を見とどけるために、長生きをしなければならない。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
20 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
21 育児に追われていると、若さが早く失われる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
22 わが子のためなら、自分を犠牲にすることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
23 子供を育てるのは、生みの母が最良である。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
24 育児から解放される時に、人間らしい自由な生活ができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
25 わが子の存在を感じるだけで、毎日の生活に張りが出る。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
26 育児に専念したいというのが、女の本音である。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
27 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのは間違っている。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

資料 2. 胎児感情評定尺度

調査票2

現在あなたは、赤ちゃんについてどのようなイメージを持っておられるでしょうか。
この評定表は、乳児に対する感情の一般的様相を知るためのものです。
下にある説明を呼んで、ありのままにお答えください。

仕方の説明

あなたは、“赤ちゃん”を思い浮かべたときに、どのような感じがしますか？
下の言葉でみた時に、どの段階にあてはまるでしょうか。
あなたの気持ちの合うところの□に、1つチェックをつけてください。
あまり深く考えないで、直感的に判断してください。

	非常 その とおり	その とおり	少 し その とおり	そ ん な こ と は な い		非 常 そ の と お り	そ の と お り	少 し そ の と お り	そ ん な こ と は な い
1 あたかい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	15 あかるい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2 よわよわしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	16 なれなれしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3 うれしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	17 あまい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4 はずかしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	18 めんどくさい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5 すがすがしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	19 たのしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6 くるしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	20 こわい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7 いじらしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	21 みずみずしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8 やかましい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	22 わずらわしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9 しろい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	23 やさしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10 あつかましい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	24 うっとうしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
11 ほほえましい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	25 うつくしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
12 むずかしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	26 じれったい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
13 ういいしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	27 すばらしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
14 てれくさい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	28 うらめしい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

表 1-1. 対照群における母性理念質問紙の得点

	肯定			否定		
	初期	中期	産後	初期	中期	産後
平均	10.1	13.4	13.4	-2.9	-3.4	-4.8
標準偏差	10.48	8.13	8.14	3.80	3.49	3.36

表 1-2. 介入群における母性理念質問紙の得点

	肯定			否定		
	初期	中期	産後	初期	中期	産後
平均	12.1	10.9	13.9	-2.5	-2.6	-3.0
標準偏差	7.65	7.70	9.19	3.26	4.52	3.42

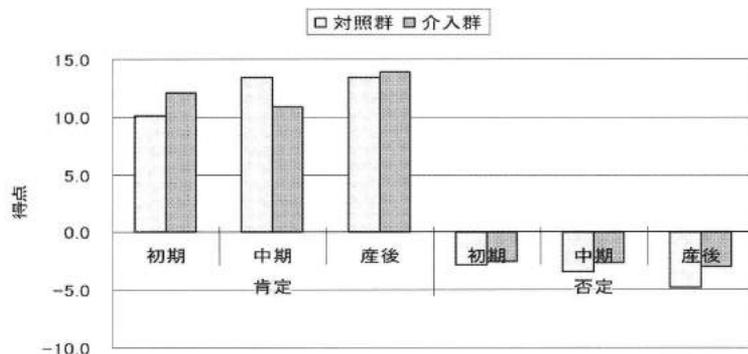


図 1. 母性理念質問紙の比較

0.2172, 否定得点については, $p=0.4858$ となり有意差は認められなかった. 産後の肯定得点については $p=0.9597$, 否定得点については, $p=0.0959$ となり有意差は認められなかった.

2. 妊娠各期における胎児感情評定尺度の変化

(1) 対照群における胎児感情評定尺度の得点 (表 2-1)

妊娠初期の接近感情得点は平均 27.7 (標準偏差 6.09), 回避感情得点は, 平均 6.0 (標準偏差 3.36), 拮抗指数は, 平均 23.8 (標準偏差 17.29) であった. 妊娠中期の接近感情得点は平均 29.8 (標準偏差 5.63), 回避感情得点は, 平均 7.4 (標準偏差 3.88), 拮抗指数は, 平均 25.9 (標準偏差 14.41) であった. 産後の接近感情得点は平均 30.4 (標準偏差 6.51), 回避感情得点は, 平均 7.5 (標準偏差 4.21), 拮抗

指数は, 平均 25.0 (標準偏差 13.00) であった. 初期・中期・産後の 3 群間で Friedman 検定を行ったところ, 接近感情において, 初期と産後間で $p=0.0155$ となり 5% 水準で有意差が認められ, 産後のほうが有意に高得点であった. 回避感情でも, $p=0.0397$ となり 5% 水準で有意差が認められ, 産後のほうが有意に高得点であった. 拮抗指数では有意差は認められなかった.

(2) 介入群における対児感情評定尺度の得点 (表 2-2)

妊娠初期の接近感情得点は平均 27.8 (標準偏差 5.60), 回避感情得点は, 平均 8.4 (標準偏差 4.78), 拮抗指数は, 平均 32.7 (標準偏差 22.60) であった. 妊娠中期の接近感情得点は平均 27.8 (標準偏差 8.14), 回避感情得点は, 平均 9.2 (標準偏差 6.46),

表 2-1. 対照群における胎児感情評定尺度の得点

	接近			回避			拮抗		
	初期	中期	産後	初期	中期	産後	初期	中期	産後
平均	27.7	29.8	30.4	6.0	7.4	7.5	23.8	25.9	25.0
標準偏差	6.09	5.63	6.51	3.36	3.88	4.21	17.29	14.41	13.00

表 2-2. 介入群における胎児感情評定尺度の得点

	接近			回避			拮抗		
	初期	中期	産後	初期	中期	産後	初期	中期	産後
平均	27.8	27.8	30.6	8.4	9.2	9.6	32.7	32.2	32.4
標準偏差	5.60	8.14	5.17	4.78	6.46	4.89	22.19	21.58	17.92

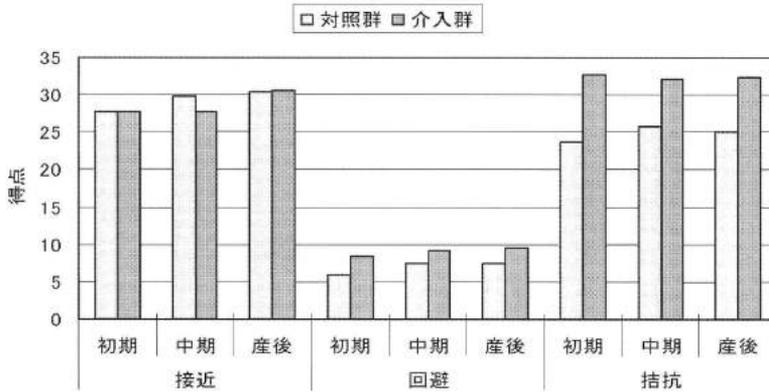


図 2. 胎児感情評定尺度の比較

拮抗指数は、平均 32.2(標準偏差 21.58)であった。産後の接近感情得点は平均 30.6(標準偏差 5.17)、回避感情得点は、平均 9.6(標準偏差 4.89)、拮抗指数は、平均 32.4(標準偏差 17.92)であった。

初期・中期・産後の 3 群間で Friedman 検定を行ったところ、接近感情・回避感情・拮抗指数いずれも有意差は認められなかった。

(3) 対照群と介入群の比較 (図 2)

Mann-Whitney の U 検定を行ったところ、妊娠初期の接近感情については、 $p=0.5808$ となり、有意差は認められなかった。回避感情については、 $p=0.0836$ 、拮抗指数については、 $p=0.0861$ となり有意差は認められないものの、それに近い形となった。妊娠中期の接近感情については、 $p=0.7479$ 、回避感情については、 $p=0.5852$ 、拮抗指数については、 $p=0.6053$ でいずれも有意差は認められなかった。産後の接近感情については、 $p=0.9677$ 、回避感情については、 $p=0.1588$ 、拮抗指数については、 $p=0.2254$ でいずれも有意差は認められなかった。

3. 母性理念・胎児感情尺度得点における平均上昇率の比較 (図 3・図 4)

(1) 対照群と介入群の上昇率比較

対照群、介入群それぞれの得点について、初期を 0 とした場合の中期・産後における上昇率を算出した。母性理念に関して、対照群・介入群の比較のため、Mann-Whitney の U 検定を行ったところ、中期肯定得点では $p=0.0061$ となり、1%水準で有意差が認められ、対照群のほうが有意に上昇していた。産後の肯定得点では $p=0.832$ 、中期・産後の否定得点においては、それぞれ $p=0.4642$ 、 $p=0.2926$ となり、特に有意差は認められなかった (図 3)。胎児感情に関しては、中期の回避感情において、 $p=0.0799$ となり有意差に近い形となり、対照群のほうが有意に上昇していた。それ以外の時期については、有意差は特に認められなかった (図 4)。

(2) 対照群各期の上昇率比較

対照群の母性理念について Friedman 検定を行ったところ、肯定得点、否定得点いずれも有意差は認められなかった。対照群の胎児感情につい

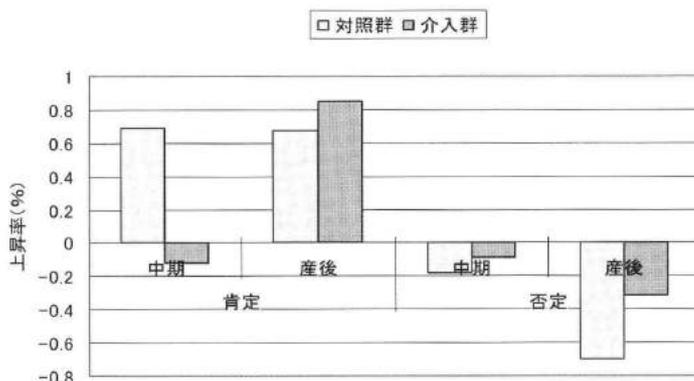


図3. 母性理念得点平均上昇率 (初期を0とした場合)

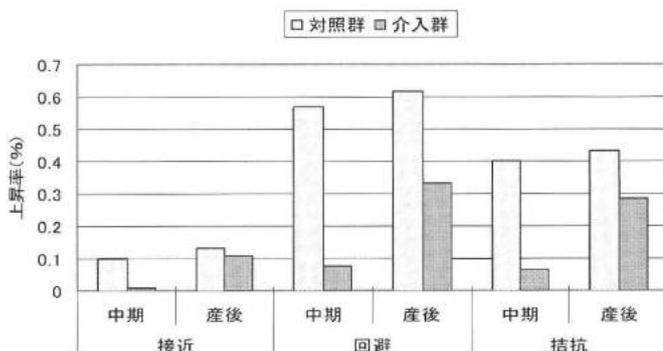


図4. 胎児感情評定尺度平均上昇率 (初期を0とした場合)

てFriedman 検定を行ったところ、接近感情では、初期と産後間で $p=0.0155$ となり5%水準で有意差が認められ、初期よりも産後のほうが高得点であった。回避感情では、初期と産後間で $p=0.0397$ となり5%水準で有意差が認められ、初期よりも産後のほうが高得点であった。拮抗指数では有意差は認められなかった。

(3) 介入群各期の上昇率比較

介入群の母性理念についてFriedman 検定を行ったところ、肯定得点では、中期と産後の比較において、 $p=0.0302$ となり5%水準で有意差が認められ、中期よりも産後のほうが肯定得点が高値を示した。否定得点では有意差は認められなかった。

介入群の胎児感情についてFriedman 検定を行ったところ、接近感情、回避感情、拮抗指数い

ずれも有意差は認められなかった。

以上、妊娠初期、中期、産後にかけて、助産師による介入を行った介入群と、行わなかった対照群の比較を行い、母性理念、胎児感情尺度それぞれの分析により、以下の点で有意差が認められた。

1. 介入群において中期から産後にかけての母性理念のうち、肯定得点に有意差が見られ、産後の方が得点が高い。
2. 対照群では、初期と産後の胎児感情のうち、接近感情に有意差が見られ、産後のほうが得点が高い。
3. 対照群では、初期と産後の胎児感情のうち、回避感情に有意差が見られ、産後のほうが得点が高い。
4. 中期の母性理念のうち、肯定得点において両群間で有意差が見られ、対照群のほうが得点が高い。

高い。

4. 介入群に対する半構成的面接の質的帰納的分析

(1) 診察を受ける前の気分について

① 妊娠初期

小カテゴリー	数	例
つわり・消化器症状	28	つわりがある、むかむかしている
通常通り	14	心配はない、いつも通り、ふつう
不安	16	不安だった、心配だった、緊張する
身体症状	11	下腹痛があった、眠かった、風邪をひいた
受診経緯	6	他院が予約でいっぱい、受け入れ可能か
胎児の存在	4	本当に生きているか、実感がしない
過去の流産	2	流産を経験している、前回流産なので心配
期待感	2	大きくなっているといいな
疑問	1	いろいろと聞かなければ

② 妊娠中期

小カテゴリー	数	例
通常通り	20	大丈夫、よい、良好、不安はなかった
つわり	16	吐き気がする、体重が増えてきたので心配
身体不調	14	入院した、おなかのほりがあった、疲れがとれない
睡眠	3	ちょっと寝不足、眠くなる
仕事	2	やめることになる
期待	1	楽しみだった

妊娠初期は、つわりや消化器症状に対する言葉が多く聞かれたが、そのほかにも何らかの不安、身体症状についての言及があった反面、妊娠判定薬ですでに明らかになっている場合も多く、通常通りの状態であったとするものも多い。胎児の存在については、また確固たるものではなく、過去の

流産体験による傷つき体験を持つものもみられた。中期に入ると、つわりに関するものや身体不調に関するものは減少し、体調の安定化が図られるケースが増加する。

(2) 妊娠が分かったときどう思ったか。(初回調査のみ)

① 妊娠初期

小カテゴリー	数	例
喜び	17	うれしい、望んでいた、安心した
驚き	15	びっくりした、おどろいた、以外だった
検査業や受診経緯	13	検査業で分かった、反応が出た、他院を受診
不安	7	不安だった、育てられるだろうか、結婚していない
妊娠するまで	5	なかなか妊娠しなかった、あきらめていた
余暇活動	5	旅行していた、スノーボードに行く予定だった
体調変化	5	生理が遅れた、生理がきていない
予期	3	なんとなくそんな気がしていた、やっぱり
合併症	3	子宮外妊娠かもといわれた、筋腫が見つかった
過去の流産	2	流産後3年を経過していた、一度中絶している

喜びや驚きという言及が多いが、妊娠が分かるまでの経緯を説明するものも多い。そのほか、妊娠するまでの経緯、体調変化、妊娠したことにより影響の出る余暇活動、合併症、過去の流産体験などのついでに言及もあり、単にうれしいだけとは言えない、様々な感情が交錯していることが明らかとなった。

(3) 超音波画像を見ている最中に感じたこと、考えたことはあったか。

① 妊娠初期

小カテゴリー	数	例
喜び	14	うれしい、かわいい、安心した、不思議だな

成長	14	大きいな、成長が早いな、育っているな
心臓	9	心臓が動いている、心拍が分かった
身体部分	8	頭が大きい、頭と体の区別が分かった
胎児の存在	7	生きている、実感がわく、ちゃんという
理解度	6	雑誌を見て勉強した、どう見ればよいか分からない
動き	5	元気がよかった、すごく動いていた
人間らしさ	4	人間の形をしていない、人間ぽくなった

② 妊娠中期

小カテゴリー	数	例
成長	17	大きくなった、成長している、人間らしくなった
喜び・安心	5	うれしいな、かわいかった、元気でよかった
身体部分	4	手足が動いていた、頭、手、膝など分かった
顔	3	顔がはっきり見えた
心臓	1	心臓の動きを見た
性別	1	さらに男の子かもしれないといわれた

妊娠初期中期を通じて、喜びや胎児の成長に関する言及が多い。また胎児の身体部分や動き、人間らしさについては初期の段階から、中期以降は顔、性別とさらに細分化した視点で画像を見ていることが分かる。

(4) 超音波画像を見終わった後、赤ちゃんに対する気持ちの変化が起こったか。

① 妊娠初期

小カテゴリー	数	例
実感	13	実感がわく、元気に育っている、ほんとにいたんだ
喜び	10	うれしい、これから先楽しみ、早く生まれてほしい

責任	9	責任感、自分が守ってあげないと
安心	8	安心した、元気だった、ちゃんと育っていた
変化なし	4	気持ちの変化は特にない

② 妊娠中期

小カテゴリー	数	例
成長	8	大きくなっている、生きている、動くようになった
感情	8	元気に生まれてほしい、毎回会いたくなる
喜び・安心	5	安心した、うれしかった
驚き	4	驚いた、こんなに大きいと思わない
性別	4	男の子か女の子かわかると思った
疑問	2	あまり動いている様子が見られなかった
変化なし	1	特にない

画像を見終わった後、妊娠初期では実感、喜び、責任、安心など、ポジティブな感情として表現しているものが多い。中期に入り、同様の表現が多いが、成長を実感する気持ちは強まり、性別に関する関心も高まることが分かる。

(5) 超音波画像写真は誰に見せたいか、見せた方から言われたことはあるか。(夫・パートナーに関するもの)

① 妊娠初期

小カテゴリー	数	例
喜び	28	喜んでくれた、夫に見せたい、うれしそう
気づかい	21	体のことを気づかってくれる、気にしてくれる
驚き・戸惑い	10	びっくりしていた、不思議そうであった
希望	2	ちゃんと生んでほしい、無事生まれてほしい

② 妊娠中期

小カテゴリー	数	例
喜び	6	嬉しそうにしている。夫の声には反応する
期待はずれ	3	もっと心配してくれるかと、私の世話まで出来ない
気づかい	2	常に心配してくれる
驚き	1	手がある

初期では、夫の喜びや気づかい、驚き・戸惑いなどの反応を中心とした語りがあり、中期も同様ではあるが、特徴的なものとしては、妊婦自身が期待した反応とはいえない事柄についての語りが見られた。

(6) 超音波画像写真は誰に見せたいか、見せた方から言われたことはあるか。(実母・そのほかの家族に関するもの)

① 妊娠初期

小カテゴリー	数	例
実母に関するもの	18	喜んでいる、大事にしてねといわれる
両親に関するもの	6	ぜひ見せたい、うるさく言われる
祖母に関するもの	3	あったかくしなさい、冷やすな
義母に関するもの	2	温かくして、アドバイスがある
姉妹に関するもの	4	育児の経験がある、結構アドバイスしてくれる
見せたくない	1	見せたいという気持ちはない

② 妊娠中期

小カテゴリー	数	例
実母に関するもの	7	話しかけている、心配してくれる
両親に関するもの	5	両親の大切さが分かる、プリントして送っている
義母に関するもの	1	関心があり、心配してくれる

いずれの時期においても、夫以外では実母に関する語りを中心となっている。

(7) 家族から言われたことの対して思うこと

① 妊娠初期

小カテゴリー	数	例
喜び	17	ありがたい、うれしい、喜んでくれてよかった
アドバイスを受けて	11	あっそうだなと思う、体を冷やすことになるのか
自覚	10	いろんなことに気をつけて、自分がしっかりする
慎重	6	一つ一つの加減が難しい、慎重になっていた
期待はずれ	3	案外あっさりしているな、他人事みたい
気兼ね	3	忙しいのに悪いな、何もしてあげられない

② 妊娠中期

小カテゴリー	数	例
喜び	8	うれしい、みんなに大切にされている
胎動	6	動いてくれると安心、動かないと不安
マイペース	1	マイペースでいきたい

初期では、喜びや自覚、慎重などの語りが多く、アドバイスを受けてどう思ったのかについても語られている。中期では、喜びのほかにも、胎動に関する語りが出現している。

(8) 赤ちゃんのために努力していることはあるか。

① 妊娠初期

小カテゴリー	数	例
食事	31	食事に気をつける、バランスよく食べる
嗜好	10	飲酒をやめた、タバコは徐々にやめていく
生活	8	規則正しくする、休養をとる、無理をしない
睡眠	4	2時3時に寝るのが普通であったが見直している
保温	4	おなかを冷やさないように

ソーシャルサポート	6	夫に協力してもらえるところはしてもらいたい
精神面	4	気分転換をする、おらかな気持ちで
体重	3	体重が増えすぎないようにしたい
変化なし	3	今はない、今までどおりに

② 妊娠中期

小カテゴリー	数	例
食事	25	きちんと食事するよう心がける、鉄分をとるように
生活	12	重いものを持たない、冷やさない
運動	6	動きすぎない
体重	4	体重が増えないようにする、体重管理に気をつけたい
嗜好	4	お酒を飲まないように、タバコがやめられなかった
学習	2	出産がどんな感じか想像している
未定	1	ない
精神面	1	ストレスをためないこと

初期・中期を通じて、食事、生活、体重管理、精神面など、生活全般にわたる注意に関する語りがみられている。特徴としては、お酒やタバコなどの嗜好品に対して、調整を行っている語りが見ら

れる。また、初期においては、夫や家族にソーシャルサポートを求める内容も認められる。

(9) どんな子に生まれてきてほしいと考えているか。

① 妊娠初期

小カテゴリー	数	例
元気	15	元気であれば、元気に生まれてほしい
健康	10	健康に生まれてきてほしい、健康であればよい
性質	10	女の子がほしい、素直な子、やさしい子
なし	1	特に考えていない

② 妊娠中期

小カテゴリー	数	例
元気	9	元気であればよい、とにかく元気で
健康	9	健康であれば、五体満足で
性質	5	いい子に、出来ればちょっと賢く

初期・中期を通じて、元気で健康であればという内容が多いが、子どもの性別や性質について希望を述べる場合も見受けられる。

5. 産後の面接（パースレビュー）の結果

実施時期については、体調が回復し、育児も次第に軌道に乗る産褥3～5日目とした。実施にあ

表3. 産後の面接時の質問内容

1. 妊娠中の超音波画像により抱いていた赤ちゃんのイメージはどんなものでしたか？
2. 妊娠中の超音波画像によりご家族が抱いていた赤ちゃんのイメージは？
3. 超音波画像検査を受けてよかったと思うことはありますか？
4. 超音波画像検査を受けてよくなかったと思うことはありますか？
5. 妊娠中の超音波画像に対するご家族の反応の変化は？
6. 実際の赤ちゃんと対面して、画像で見える赤ちゃんによりイメージしていたことと同じと感じたところがありますか？
7. 実際の赤ちゃんと対面して、画像で見える赤ちゃんによりイメージしていたことと違うと思ったところがありますか？
8. 出産全体を振り返っての感想をお聞かせください。
9. 出産後からいままでの育児を振り返っての感想をお聞かせください。
10. これから、どんな風に育児をしていきたいか、お考えがありましたらお聞かせください。

たっては、授乳時間や母親の体調を考慮し、負担にならないよう配慮した。質問内容は表3のとおりである。対象者の体調や、時間制限もあり、すべての項目について聞き取りは難しく、出産の振り返りが話題の中心であった。妊娠中の超音波検査については、ほとんどの対象者が、毎回楽しみであったことを述べていた。また、画像で見ていた胎児と、現実の胎児のイメージの変化については、連続性が保たれている場合と、まったく別個のものであると感じている場合のあることがわかった。対象者の語りをありのまま受け止める様努め、満足感や自信につながるような情緒的支援を行った。

IV. 考 察

1. 妊娠中の超音波検査による心理的効果について

妊娠期間中の変化については、花沢は、妊娠初期、中期、後期の3群に対して、母性理念の変化を調査しているが、ほとんど差を見出すことは出来なかったと述べている。これは、母性理念が変動するほどの重い体験をしていないことが多いためと推測されている。本研究では、産後の調査も行ったが、介入群では中期の母性理念のうち、肯定得点が一時下降するものの、産後は伸びを見せ、対照群を上回るようになっていく(図1)。これは、出産という体験が、母性理念が変動するほどの重い体験であったという影響も考えられるが、助産師による介入も、何らかの功を奏したのではないかと考えられる。母性理念のうち、否定得点については、対照群が下降を見せているが、介入群でも数値的には横ばいで、増加傾向にはない(図1)。

胎児感情については、中期や産後の調査のうち、回避感情において対照群では有意差だが、介入群で有意でなく、上昇が抑えられている(図4)。本研究の仮説である「胎児超音波画像を情報交換ツールとして利用した介入により、妊婦の母性理念や胎児感情の向上に効果がみられる。」ということに関しては、初期と中期の比較では、母性理念、胎児感情各質問紙の得点上、有意差は表れなかった。産後の面接も、画像を中心とした話題という

よりは、出産自体の話題が中心となっており、仮説がはっきりと裏づけられた結果とはなっていない。

以上のように、胎児画像そのものの効果については、胎児画像を見ない妊産婦を対照群とした比較を行っていないので、明確にできなかったが、助産師による介入は、母性理念の肯定得点の上昇や、胎児感情の回避感情の抑制など特に産後に好影響を及ぼしている。加えて、妊娠初期から決まった助産師がかかわることで、母親の安心感の助けとなり、より効果的な働きかけが出来るのではないかと考えた。村井は、「妊娠期から出産後の期間は女性特有のライフ・イベントであり、女性のアイデンティティにとって大きな転換期として重要である。特に初産婦にとっては、それまでのライフ・スタイルから新しいライフ・スタイルへ再方向づけする役割の移行期である。」と述べている⁹⁾。母性理念、胎児感情各質問紙の得点の変化は、まさに妊娠期から出産後にかけての『役割の移行期』に伴って、変動を呈していることがわかった。肯定的な感情と否定的な感情の両方を合わせ持ちながら、アイデンティティの転換を求められる女性にとって、周囲のサポートの重要性を再認識させられる結果となった。

2. 妊娠中の心理と必要な助産師の介入について

今回の研究では、介入群に対し妊婦健診の後に、超音波画像を話題の中心とした、半構成的面接を実施した。まず診察を受ける前の気分としては、胎児の存在に対し実感したり、期待する気持ちはあるものの、初期においては何らかの身体不調が存在しており、中期になるとそれはいくらかの軽減傾向を見せる。妊娠が分かったときどう思ったかについては、肯定的な受け止め方が大半を示していたが、過去の流産や合併症に対する不安も挙げられていた。

超音波画像を見ている最中に感じたこと、考えたことについては、喜びや成長、身体部分など確認が行われている。初期では心臓の動きが注目点であり、中期になるとそのほかに顔や性別などが加わってくる。初期には人間らしさに関する言及

もあり、胎児の形のはっきりしない初期においても、人間らしく具現化して捉えようとする意識が働いていると思われる。超音波画像を見終わった後、赤ちゃんに対する気持ちの変化が起こったかについては、胎児を実感したり、喜びや安心を抱いており、画像による情報が妊婦の心理に好影響を及ぼしていることがわかる。責任にまつわる言及もあり、超音波検査は、心理的な影響のみでなく、行動面にも変化を呼び起こすような、貴重な機会となっていることが分かる。超音波画像写真は誰に見せたいかの問いについては、夫・パートナーに関するものが大半を占めていた。画像を見ることは、喜びや驚き・戸惑いなど、夫やパートナーにとっても、感情を揺さぶられる体験である。また、夫から妻へ、妻から夫へと双方向での気づかいやいたわりあいがあることが述べられており、出産後の協力体制のベースとなるような体験を積み重ねていることが推測された。

夫以外としては、やはり重要他者である実母についての言及が多い。出産育児の先輩としての母親の影響力は大きく、また、育てられるものから育てるものへ変化を遂げる妊婦が、自身と母親との関係を見つめなおし、協力体制を整えていくことが現われていた。家族から言われたことに対して思うこととしては、うれしさと同時に、自覚を新たにしたり、慎重に生活するなどの行動上の変化が起きている。一方、期待はずれであったり、気兼ねを感じたり、あまり言葉に左右されず、マイペースでいきたいと感じている向きも見られた。赤ちゃんのために努力していることに関しては、食事や体重管理など生活一般に関する以外に、精神面を健康に保つという事柄が挙げられていた。

どんな子に生まれてきてほしいと考えているかについては、元気で、健康でという表現が大半であったが、赤ちゃんの性質や性別などについても期待や要望を述べていることは、特徴的であった。子どもは「授かるもの」から「つくるもの」に変化しているといわれているが、妊娠中から親の期待は高まる傾向があるようである。以上、半構成の面接の結果について分析を行った。超音波画像

は、両親や家族が胎児と交流をはかる新しい手段のひとつになっている。超音波で胎児の画像を見て、生まれてくる子どもに対して、思いをはせ、想像を膨らませる。妊娠中から、すでに母子の情緒的な交流は始まっており、物言わぬ胎児であっても、何らかのメッセージ性を感知し、母親や父親の行動を変化させるような存在として捉えられていた。助産師の介入のあり方としては、妊婦のポジティブな言及のみではなく、ネガティブな言及についても十分受け止め、見守る姿勢を保つことが必要と考えた。特に初期に関しては、身体不調を伴いやすく、また、未入籍の問題、仕事面の問題など付随する事柄も多いので、より強いサポートが要求されている。

3. パースレビューとその効果について

介入群 23 名中、23 名が自然分娩、2 名が緊急帝王切開、1 名が予定帝王切開、2 名が調査未実施であった。実施時期が産後 3・4・5 日目のいずれかということで、体調も回復し、母乳栄養も軌道に乗っているかもしくは、個別に指導を受けている場合がほとんどであった。多くは、出産にいたるまでの困難さ、身体的・精神的苦痛を再現するかのごとく吐露していた。また、出産後の感動や夫・家族への感謝についても触れ、産後の育児については、母乳が十分に出るまでの苦労と、次第に育児に慣れた体験を語っていた。数井らは、「妊娠期と出産後数ヶ月は、多くの場合、強烈な感情のぶれや変化などを伴うが、心理的未組織化・混乱が起こることと、自己の新たな再組織化が起こることの、両方の可能性を持つ時期である。」と述べている⁷⁾。今回の調査でも、同様の結果が得られた。また、緊急の帝王切開になった症例については、心の準備が十分でないままに手術の選択を迫られ、児の安全を優先する状況ゆえに、自分自身の気持ちなどがどこか置き去りになった部分、出産に対する不全感など残っていたようであった。しかし、2 名それぞれについて各質問紙の得点を見てみると、肯定得点や接近感情が下降する、否定得点や回避感情が著しく上昇するなどの変化は特に認められなかった。パースレビューという機会を得たことで、自身の思いを表出し、医療スタッフも看護上

重要な情報としてそれを捉えることになるので、より対象にあった関わりを展開していけるのではないかと考えた。

今回の研究では介入群において中期から産後にかけての肯定得点に有意差が見られ、上昇を示しており、また、対照群と介入群の産後の回避得点に有意差が見られ、介入群の回避得点の上昇率が低く抑えられている。このことから、パースレビューという介入によって、何らかの心理的效果は見られているものと考えられる。また、各質問紙の得点の推移を、支援の手がかりとして生かしていくことの有用性について、今後も検討していきたいと考えた。

4. 妊娠中から産後の助産師の介入がもたらす効果について

妊婦が、画像上に写し出された胎児画像を視覚でとらえることと、妊婦の心理的效果の有無が議論されてきた。先行研究によれば、画像を見ることは妊娠の事実を確認する上で効果的であった⁸⁾とする一方、超音波診断による妊婦健診が周産期の異常を低下させる効果はなく、妊婦の健康管理に対する生活改善との関係性についても明らかな効果はなかったとする研究結果もある⁹⁾。しかし、超音波診断の技術が進歩し、津々浦々まで普及している現代において、妊婦健診から超音波検査を差し引いて考えることは困難となっているのが現状である。妊婦や家族のニーズにこたえるという点から言っても、胎児との情報交換のためのツール、交流を図るためのツールとしての超音波診断の意味合いは大きい。一方、超音波診断で発見される異常は完全ではないという医療者側の認識と、子宮内を覗くことの出来るモニターカメラ的な一般人との認識のギャップは、様々な問題を発生させていることも事実である。

永田らによると、すべての妊産婦が医療の対象となり、妊娠・出産が無事に経過し、元気で健康な赤ちゃんを出産するということが当たり前であるかのような期待が強まる¹⁰⁾。妊娠経過の中で、予想外に超音波診断で、胎児が何らかの疾患を持っていることが明らかになったり、切迫流産の母体管理のために、長期入院を強いられたり、出産

前にさまざまな葛藤をもたらすことも増えてきている。出生前診断をめぐる倫理的な問題は、今後ますます議論を呼ぶものと予想される。本研究で使用した母性理念、胎児感情尺度の質問紙は、いずれも肯定一否定、接近一回避というように、母親の児に対する感情を、母性愛という本能的視点で捉えるのではなく、愛着的感情と拒否的感情の相克の間にさまよう母親の体験として捉えるという視点を持っていた。分析の結果、胎児超音波画像そのものの効果は明確にできなかったが、助産師の介入によって、妊産婦の心理面に何らかの好影響を及ぼすことが示唆された。三澤らは、妊娠中は、胎児の存在を確認することによって自分と胎児との関係を構築し、さらに自分と他者との関係を再構築する初期段階の準備期間として重要な時期であると考えられると述べている¹¹⁾。母性を発達の視点で考えることの大切さを感じるとともに、超音波画像を情報交換ツールとして利用し、妊婦が胎児の存在を夫・家族に伝達するための手段としての活用をすすめることも、有用であると考えられる。また、産後のパースレビューにより、母親の体験や感情をまるごと支えることの意味を見出すことが出来た。

V. 本研究の限界と課題

本研究は、胎児の超音波画像を情報交換ツールとして利用した、助産師の介入により起こる心理的变化に焦点を当て、その関連を検討した。しかし、超音波画像そのものの効果は、超音波画像を全然見ないという妊産婦たちを対照群として比較していないので、明確ではない。また、調査期間が妊娠から出産全期にわたったことから、研究協力者の数が57名と少なく、また、調査も一施設においてのみ行ったので、限られた結果であると考えられる。助産師である研究者が介入を行ったが、実際の臨床場面に応用するには、多くの助産師が関わりを持つので、助産師の個性も関与する可能性が出てくる。今後は、得られた結果をもとに、さらに拡大して量的な分析をし、妊婦に対する心理的援助のシステム化を検討すること、それを導入しての評価が課題である。

VI. 結 論

助産師が、妊娠初期・中期の胎児超音波画像を情報交換ツールとして利用した介入、産後のパースレビューを行った結果、母性理念のうち肯定感の上昇がみられ、胎児感情の回避感情の抑制にも効果が認められた。

謝 辞

本研究の主旨にご賛同くださり、快くご協力いただいた研究協力者の皆様に心より感謝申し上げます。研究協力者である妊婦の皆様が、お忙しい中貴重な時間をさいてくださり、ありのままのご体験をお話しいただいたことが、研究を行う上で大きな原動力となりました。また、快く調査の場を提供して下さった産婦人科部長様、看護部長様、外来師長様、産婦人科外来スタッフの皆様、産科病棟師長様、並びにスタッフの皆様にご心より感謝を申し上げます。研究論文作成の過程におきましては、貴重なご助言とご指導をいただきました東北福祉大学、村井則子教授に深く感謝申し上げます。尚、本稿は、研究者が東北福祉大学通信制大学院総合福祉学研究科福祉心理学専攻在学中に、修士論文として提出されたものより、一部を抜粋したものです。

文 献

1) Langer M et al: Psychological effects of ultra-

- sound examinations: changes body perception and child image in pregnancy. *Journal of Psychometric Obstetrics and Gynecology* 8: 202-209, 1988
- 2) Myra S et al: Ultrasound scanning in women with raised serum alpha fetoprotein: long term psychological effects. *Journal of Psychometric Obstetrics and Gynecology* 6: 25-31, 1987
- 3) Suzan M et al: Effect of fetal movement, ultrasound scans, and amniocentesis on maternal-fetal attachment. *Nursing Research* 38: 81-84, 1989
- 4) 花沢成一: 母性心理学, 医学書院, 東京, 1992
- 5) 青木康子 他: 母子の心理・社会学. 助産学体系 5 巻, 日本看護協会出版会, 東京, pp 207-244, 2002
- 6) 村井則子: 母親の心理学, 東北大出版会, 仙台, pp 202, 2002
- 7) 数井みゆき 他: アタッチメント, 生涯にわたる, ミネルヴァ書房, 東京, pp 181, 2008
- 8) 鈴井江三子: 超音波診断を含む妊婦健診と含まない妊婦健診を受けた妊婦の体験. *川崎医療福祉学会誌* 15: 91, 2005
- 9) 鈴井江三子: 妊婦健診に用いられる超音波診断についての諸議論. *川崎医療福祉学会誌* 14: 14, 2004
- 10) 永田雅子: 妊娠中からの心理的サポート. *臨床心理学* 6: 740-743, 2006
- 11) 三澤寿美 他: 母性発達課題に関する研究 (第2報) 妊娠期にあるはじめて子どもを持つ女性の気持ちに影響を及ぼす要因. *山形保健医療研究* 7: 18, 2004